〈展示室の改修について〉

中央図書館が開館して二十五周年の節目にともない、この春、展示室が新しく生まれ変わる。

開館以来、展示室では館蔵資料の公開と資料に関する情報の発信をめざして、展覧会を毎年定期的に開催してきた。資料を蔵の中で眠らせてしまうのではなく、独自の切り口で特集し、陳列することによって、所蔵品の魅力を伝える重要な場として機能してきたといえる。だが、長く親しまれてきた展示室は、経年に伴うほころびが、少しずつ目立ち始めていたことも否めなかった。

幸いにもこの度、開館二十五周年記念事業の一環として、展示室を全面的にリニューアルする運びとなり、より良い環境で館蔵資料をご覧いただけることとなった。LEDを導入することで、資料は細部まで見やすくなり、新調した大型の展示ケースでは、今まで以上に、多様な所蔵品の陳列が可能となる。壁面に増設した違い棚も、資料を魅力的に展示する新たな空間として、注目していただきたい。



三月十七日より約三か月にわたって開催される記念展示では、この新しい展示室を最大限に活かして、選りすぐりの名品を公開する。国宝・重要文化財のみならず、開館後に新たに収蔵した〝早稲田のたから〟の数々を、是非ともリニューアルした展示室と共にお楽しみいただきたい。

編集後記

嘗て〝新中央図書館〟と呼ばれていた当館も、早、開館二十五周年を迎えた。悲願の新図書館建設事業に高揚感を覚え、百五十万冊余の資料の引越しに、総出で奮闘した記憶を共有する館員も、今では十数名となっている。図書館員の業務も大きく様変わりした。

そんな中、今年度は、開館二十五年周年記念事業が企画され、若手館員を中心に、展示室改修、記念展示、講演会、シンポジウム、VRコンテンツ作成といった様々な事業・催しが実施された。押し寄せる日常業務の傍ら、斬新なアイデアを次々と繰り出し、新しいものを生み出すべく、嬉々として取り組む彼らの姿を目にするに付け、羨ましさと頼もしさが交錯する。

若手の館員諸君にとって、これら一連の記念事業は、創造体験の場であると同時に、図書館の歴史や、数百年を経て猶、厳然として存在する歴史的文物に目を向ける契機ともなったに違いない。

二十五年前、業務が様変わりしたように、否、それ以上に、資料媒体の変化や、図書館をめぐる環境の変化の波が押し寄せ、業務の枠組みをも揺るがそうとしている今、変えねばならぬものと変えてはならぬものとを見極め、館員の智慧を結集して、新しい道を切り開かねばなるまい。本紀要も、その相応しいあり方を模索し、リニューアルして行きたい。しかし、何よりも、図書館員にとって身近な、研鑽発表の場であり続けたいと思う。

（小林記）

図書館紀要編集委員会
小林邦久（資料管理課長）
小池　直（資料管理課）
長谷川敦史（図書館総務課）
松崎正隆（資料管理課）
馬渕敬子（資料管理課）

早稲田大学図書館紀要　第64号
二〇一七年三月十五日　発行
編　集　早稲田大学図書館紀要編集委員会
発行人　荘　司　雅　之
印刷所　三美印刷株式会社
発行所　早稲田大学図書館
東京都新宿区西早稲田一ノ六ノ一
〇三（三二〇三）四一四一